探訪 北の風景 84

松前の桜と日本初の種痘

渡島管内松前町

青木和弘

若い頃、夜桜を見ようと松前城を訪れたが、まったく人のいない暗闇で、がっかりした思い出がある。いまはライトアップされ、桜に包まれた美しい天守閣を眺められる。松前城の桜は江戸時代から植樹され、次第に数を増してきた。現在は250種1万本が4月下旬から5月下旬までの約1カ月間咲き誇る。

松前藩は15から16世紀に渡島半島南部に勢力を広げた蛎崎（かきざき）氏が豊臣秀吉や徳川家康から蝦夷（えぞ）地支配と交易を公認され、江戸時代に松前氏と改名して松前藩になった。

北海道の太平洋側と千島列島を東蝦夷、日本海側を西蝦夷と呼んだ。18世紀半ばになると帝政ロシアが千島列島を南下し、松前藩も1754年、アイヌ民族の住む国後島、択捉島、ウルップ島を管轄する国後場所を開設して日露両国間に軋みが高まっていく。

1789年、東蝦夷地の国後島と根室地域で、アイヌが過酷な使役に反発して蜂起した「クナシリ・メナシの戦い」が勃発する。反乱は鎮圧されるが、アイヌとの融和でロシアの進出を抑え、蝦夷地の安定経営を図りたい幕府は1799年、東蝦夷地を直轄地にし、1807年には西蝦夷地、その2年後には樺太も直轄領にして東北諸藩に北方整備を命じている。

同年に発生したロシア船によるエトロフ島襲撃事件で、漁場の番人小頭、中川五郎次らが拉致され、シベリアに5年半も抑留された。

日露間の緊張は続き1811年、千島列島の測量調査をしていたロシア軍艦ディアナ号のゴローニン艦長が国後島に上陸したところを松前藩の役人が捉え、松前に拘留した。一方、ディアナ号副艦長のリコルドは、官船・歓世丸を襲い、高田屋嘉兵衛をカムチャッカに連行するという「ゴローニン事件」が発生する。嘉兵衛の尽力で事件は解決し、そのときシベリアに抑留されていた五郎次も解放されることになる。

五郎次は1812年、送還される途上、天然痘を予防する種痘を解説した医学書を手に入れ、港町のオホーツクでロシア人医師から種痘の技術を教わり帰国した。その後、五郎次は松前藩の足軽に取り立てられ、種痘を行う機会はなかったが、箱館（函館）で天然痘の大流行があり、日本で初めて牛種痘に挑む。1824年に田中イク（箱館の豪商田中正右衛門の母）が11歳で種痘を受けという記録が残っている。長崎から日本に種痘が入る25年も前のことだ。

五郎次は箱館の医師白鳥雄蔵や高木啓策、松前藩医の桜井小膳らに種痘の技術を伝え、津軽や秋田などへも種痘が広まった。

ゴローニン事件の解決で日露関係は落ち着き、蝦夷地は松前藩に返還される。しかし、幕府は松前藩に北辺警備を担わせ、1849年には築城を命じ、5年後、天守閣がそびえる松前城が完成した。日本初の種痘を行った五郎次が80歳で没したのはその6年前だから城を見ることはなかったが、当時の桜はいまも松前城公園や周辺の寺の境

松前城の光善寺境内にある「血脈桜」。樹齢270年ほどといわれる。美しい乙女の姿を借りた桜の精が住職の枕元に現れ、死者が仏になれる「血脈」を授けたという伝説が残る

天守閣のある松前城が完成したのは1854（安政元）年、ペリー艦隊が浦和に来航した翌年になった。明治維新後、大半は取り壊され、天守閣などは国宝として保存されたが1949年に焼失し1961年に再建されている

内で見事に咲き誇っている。

１９２４（大正13）年、種痘の功績が称えられ、五郎次に従五位が贈られた。世に出回っている肖像画は叙勲の際、提供を強く求められ、孫娘「よし」の婿、栄吉をモデルに描いたものだから「ニセモノ」だという。

五郎次の墓は松前城の、天守閣の近くの法源寺にある。日露の軋轢の中、日本人に種痘の技術を伝受したロシア人医師がいたことを忘れてはならないだろう。

＊中川五郎次は「五郎治」と記されることが多いが、本稿では弘前大学医学部・松本明知氏の「本邦牛種痘法の鼻祖中川五郎次研究の歩み（上）」（日本医学雑誌第53巻2号、平成19年6月発行）が正しいと指摘した「五郎次」を使用した。

松前藩屋敷が観光施設として松前城の近くに設置されている。江戸時代の様子が展示されている

松前藩屋敷では再現された街並みを散策できる